

女たち
海の
さよなら



shiina makoto

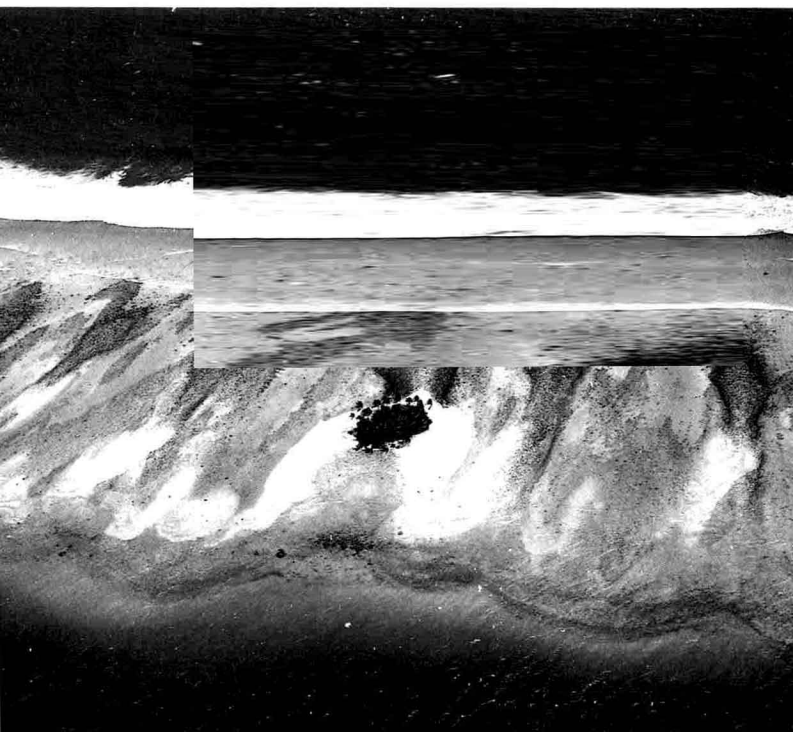
椎名誠

さよなら、

の女たち

石誠

集英社



さよなら、海うみの女おんなたち

一九八八年九月一〇日 第一刷発行
一九八九年一月一九日 第六刷発行

定 価 七八〇円

著 者 椎名 誠しいな まこと

発 行 者 若菜 正

発 行 所 株式会社 集英社

三三〇五 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇

電 話 出版部 (〇三) 二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三) 二三〇―六三九三
製作課 (〇三) 二三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

初出誌

「青春と読書」

昭和六二年八月号―六三年六月号

さよなら、海の女たち ● 目次

ゲンジョー色の女――7

伊勢海老騒動――31

珊瑚礁の女――53

七面鳥ホテル――77

座間味にて――101

貝の踊り——123

秀さんの女房——145

あつい冬——169

秘密宅急便——195

三分間のサヨウナラ——219

装画 沢野ひとし

屏写真 中村征夫

装丁 菊地信義

さよなら、海の女たち

ゲンジョー色の女

二十三歳のときに三カ月の恋をした。女は大学生で、いつも布製の大きなバッグをぶらさげていた。

ぼくはそのバッグが気に入らなかった。すこし冷たい感じもするけれど、すらりと伸びた肢体と、よく光る眼をした、おそろしいくらい美人だったので、もっと気のきいたバッグを持つてくればいいのに、と思っていたのだ。

女は伊勢志摩の生まれで、わたしは海に潜って貝を採ってくるのがとてもうまいんだ、とすこしきつい眼をして言った。

ぼくはその頃、名古屋から西へは行ったことがなかったので、伊勢のあたりがどんなふうな海なのか、まったくわからなかった。伊勢志摩という文字と語感がとても綺麗に思えたので、その地名だけでぼくの頭の中には女の潜っていく蒼く美しい海を眩しく想像することができた。

一番海の水が透きとおるのは、秋のはじめの頃よ、と女はぼくの質問にこたえて言った。

「秋のはじめの頃は、海の色がグンジョー色になるよ」

と、女はその時だけすこし眼をつぶりながら言った。

「そうすると波止の堤防の上に立っただけで、わたしの好きな白い貝がよく見えるからね。だからわたしは秋の海が好きだったな」

女がそんなふうに、自分の国の海のことを話すとき、ぼくはなにか気持の奥の方ですこしいら立つことがあった。

どうしてそんな気持になるのかよくわからなかった。そしてぼくはぼくで自分の育った町の海の話をした。

遠浅の泥だらけの干潟と、そこに棲んでいるおびただしい数のボロクズのようなチビ蟹とか、ハマグリ採りの話をする、女はまた眼を光らせ、下から見上げるようにして、黙って真剣に聞いていた。それから、

「その海はどんな色をしているの？」

と、聞いた。

すこし考えたけれど、ぼくの頭の中に浮かんでくる、ぼくの町の海の色は、どんなふうにとりつくろっても、汚い青色か緑がかった灰色、といったあまり目のさめるようないい色にはならなかった。

そこで仕方がないので、

「ねぼけたような青だよ」

と、嘘をついた。青色だけだったら、あまりにかけはなれて美しすぎるので、ねぼけたような……とあいまいな色の気配を大いそぎでつけ加えておいたのだ。

女はコキザミにうなずいて、「ふーん」と言った。

それでお互いの海の話はおしまいになった。

知りあつて一週間目に映画を見に行った。朝から雨が降っていたが、午後おそく小降りになり、その雨の中でぼくは女を待っていた。

女は見当をつけていた駅の改札口ではなく、山手線のちょっと不安になつてしまふくらい丈の低いガード下の坂道から歩いてきた。透明のフード付きのレインコートを着て、両手をポケットの中にそのままずぼりと突っこんでいた。

「このコートね、首すじのところから雨が漏れてくるんだ。いやになっちゃう」

女は顔をしかめ、肩からだらんとぶらさげていたコートの中の布カバンをかきまわし、半分濡れてくしゃくしゃになったハンカチを出した。

ぼくは女と一緒に入っていけるように傘を差しだしたのだが、女はその意味に気づかなかつたのか、ぼくよりすこし離れたところを、またさっきと同じように透明なスルメイカのような

恰好ですたすた歩きはじめた。

土曜日の日比谷界限は若い男女連れが一番多いようだった。

雨はけぶった霧のようでもうほとんど気にならなくなっていたが、通りを歩く人達はみんな傘を差したままだった。

女とぼくは有楽座に入り、ロビーにぼんやり佇んでいる沢山の人々の中でなんとなく所在をなくしていた。

ロビーの人々は次の上映開始を待っているのだが、みな着飾って存分におしゃべりしているようだった。

女はナイロンのレインコートを脱ぎ、丸めて布のバッグの中に入れようとしていた。

「中のものが濡れないかなあ……」

と、ぼくはすこし困った気分になりながら、低い声で言った。女の手の中で丸くなったレインコートはあきらかに沢山の水滴を床に落していたので、女の行動はひどく乱暴に見えた。

「いいの。どうせほかのも濡れてるんだから」

レインコートを収めてすっかり丸くふくらんだバッグを片手で叩き、女はそこではじめてぼくを見つめ、

「ひっ」

と、というような声を出して笑った。

映画は「アラビアのロレンス」だった。場内は満員だったが、映画がはじまるとそれまで館内いっぱいにふくらんでいたざわめきがおそろしいくらいに急速に静まり、その人工的な静けさにぼくは変に激しく圧倒されていた。

女はずっと黙って熱心に映画を見ていた。

ロレンスたちがアカバ湾を攻撃する場面ではじめて女は横をむきぼくの眼を見つめ「よかった」というような顔をして見せた。

映画が終ったあと、近くのレストランに入ってビールをのんだ。

女はビールをコップに半分ほどのんだだけで、あとは目の前のハムやサラダをつまんでいるだけだった。

「砂の中に少年がのまれていくところがかなしかったね」

と、ぼくは言った。

女はそれにはこたえず、

「あの映画の本を読みたくなったわ」

と、すこしかすれ気味の声で言った。

店を出ると、雨はすっかりあがり、なまあたたかい風が吹いていた。女はレインコートが入っているのなんだか滑稽なくらいに丸くふくらまった布製のバッグを中学生の通学スタイル

のように、斜めに肩にかけ、

「風がしめっていて気持ちわるいね」

と、さっきよりもっとかすれた声で言った。

「台風が近づいているらしい。まだ沖縄のずっと先の方らしいけどね」と、ぼくは言った。

女は先に立ち、すばやく駅の方にむかった。

映画を見たあとで食事をして、それから日比谷公園のへんを歩くのが一番ありふれていてしかも効果的なコースだな、と二日前、ウイスキーにすこし顔を赤く光らせながら大貫が自信たっぷりに言っていたのを頭の中に思いうかべていた。

「ちょっとそのへん歩いていこうか……」

と、今ならまだ言えるのに、と思いつながら、いつの間にか有楽町駅の喧噪に触れるところまで歩いてきてしまった。

信号に人だかりがあり、その先に警官の姿が見えた。信号はすぐ変り、ほとんどの人が交差点を渡りはじめた。警官のまわりに数人の男女が立ち止り、それからすぐ興味を失なったらしくまた同じように歩いていった。

警官の前に酔っているらしい男がしゃがんでいた。

「うるせいな、いちいちおめえ……」